砂の錨をのみこんで

遥弥生
水面

拝啓

仲秋の候お変わりなくお過ごしでしょうか。僕は本日シンガポールに到着しました。其方は段々涼しくなってきて、もう読書の秋と云う様な頃ですね。君は相変わらず夜更かしをしてランボオを読んでいるのでしょうか。

此方は乾季、真夏の様な日々が続いております。日中は三十度を超える日もあり、暑さが苦手な僕には中々堪えます。此の間初めてスコールに降られた時は余に激しいのに驚きました。いつか君と行った山陰も突然雨が降り出すことが多かったですね。普段は理知的な君が、俄雨に振られる度子供のようにむくれていた様子は新鮮で少し面白かったです。尤も、此方は雨が上がればすぐに太陽が照り出すし、乾燥しているので幾分か過ごしやすいですが。

何とはなしに手紙を書いていると思い出話を始めてしまいそうなので、気を取り直して僕の近況を綴りたいと思います。先日から給油の間に一週間ほどの休暇を得たため、市街の方まで少し足を延ばしてみました。

此度の航海で時折立ち話をするようになった通信士が（口達者で軽薄そうな風貌ですが腕は確かな奴です）シンガポールを訪れるのは三度目で、華人街には是非行っておくべきだというので、目当てにしていたのですが、道中の都市部の雑多さも不思議な魅力がありました。竣工間際のビルが幾つも立ち並んでいるかと思えば、その陰にはあばら家が連なり、子供らが駆け回っていたりします。空港へと繋がるハイウェイの建設も近いうちに始まるそうで、正に都市化の只中であることを実感します。やはり僕は活気のある街が好きだ。

写真を二、三葉同封しますので、少しでも此の国の雰囲気が伝わると嬉しいです。其方は朝夕冷え込むでしょうから、お体には気を付けて。また手紙を書きます。

敬具

＊

手紙からは潮のにおいが薫った気がした。

目をつむり、まぶたの裏の海のうえの、大きな船を見つめる。かつておとうさんが乗っていた、びっくりするほど大きな船だ。わたしはその船を見たこともないし、積み荷も行き先も、口数の少ないお母さんからは聞いたことがない。けれどもこの手紙を読み終えたとき、どこか遠くの外国の港に泊まるおとうさんの船と、たくさんの人や荷物でにぎわう街と、そこに立って、ずっと遠くの、お母さんのいる日本のほうを眺める、会ったこともないおとうさんの立派な背中がありありと浮かんできた。

それで、わたしは確かに二人の娘なのだと思えた。

わたしが物心ついたときからずっとそのままにされている、おとうさんの書斎。いつからか、お母さんの目を忍んでは、陽がうまくあたらないこの部屋で過ごすのが日課になっていた。無骨な机のうえに放置された、金の懐中時計を開けてじっと見つめてみたり。わたしよりもずっと大人が使う、背の高い安楽椅子に深く腰掛けて昼寝をしてみたり。箪笥の一番下の引き出しにあるタバコやお酒に手をつけたことはさすがにないけれど、ラベルのうえの、クラスで一番賢い笹井くんだってわからないようなアルファベットの文字列を、自分の手帳にたくさん書き留めてある。わたしはこの部屋でずっと、死んだおとうさんの痕跡を、まだ知らないわたしの系譜を必死になぞってきた。

それが今日、なにか報われたような気がした。

箪笥の引き出しのしかけに気づいたのは偶然だった。一番上の右側の小さな引き出しは、わたしがずっと空っぽだと思っていたもの。今日みたいにまだほんのりと暑い秋の日には、ちょっと引き出した箱の中にてのひらを広げて、木製の底板の冷たさを楽しむのが好きだった。今日も学校から帰ると、お母さんがパートで出かけているのを確認してから書斎に忍び込み、日差しの熱をやり過ごそうとしたのだった。この部屋を訪れるようになって、三度目の秋。わたしの指もいつのまにか長くなっていて、手を差し込んだとき、引き出しの一番奥を思いきり突いてしまった。怪我をするかと考える間もなく手を引いたけれど、ぶつけた感触は想像していたよりもずっと弱々しくて、指先に痛みが走るかわりに、パタンと軽いものが倒れる音がした。壊してしまったかもしれないと、震えながら慎重に引き出しの口を広げると、わたしが小さいと思っていたその箱にはずっと続きがあって、一番奥から、横倒しになった一枚の木の板とともに、綺麗な折り目をこちらに向けて並ぶ、たくさんの紙が顔を出した。

とんでもない秘密を暴いてしまったのかもしれないという恐怖と興奮は、けれども、つまみ取った一通を読むうちに心の底に消えていって、かわりに深く温かいものがじんわりと広がった。これを読むまで、わたしの今いるこの部屋が誰の部屋なのか、ほんとうには知らなかったような気さえした。いや、むしろ今、手紙を覗いてみたことで、わたしが吸っているこの埃と黴の混じった空気が、たしかにおとうさんの時代につながっているのだと確信できたのだと思う。

温かくなった瞼を開けると、奥のほうの小さな窓から差し込む傾いた太陽の光がちらついて、いつもより少し眩しく感じる。

わたしは折り目にそって畳みなおした手紙を、もとのあたりに戻して引き出しを閉じた。それから扉の真鍮のノブに手をかけて書斎を出ようとしたけれど、思い立って振り返り、机の上の懐中時計を取り上げて、スカートのプリーツの、すきまのところにあるポケットにしまった。

ささやかな記念品のつもりだった。

教室の外、夏より少し澄んだ空気のなかを、冬より近い太陽が突き抜ける。日差しの正体が熱ではなく光線だったのだと改めてわかるような、そんな午後。窓際の一番後ろに座るわたしは季節のうつろいを感じつつ、そわそわと時間のたつのを待っていた。

どうにか脳みそを動かしておかないと、心臓の刻む音に胸の中がのみこまれるような気がして、わたしは校庭の端の並木を見下ろし、濃い青葉の中にかすかに混じる黄金色の葉を数えてみる。今日は少し暑い日だけれど、涼しい日も徐々に増えはじめていて、もう読書の秋というような頃だった。

授業は国語。本を読むのが好きなわたしにとってさえ、この担任の石戸先生にかかれば、あっというまに退屈な授業になりさがる。暇つぶしのほとんどの手段を封じられているクラスメイトたちの多くには、国語、とくに今みたいな交替での音読の時間はかっこうの昼寝の機会になっていた。前のほうに目をやれば、教卓近くの子たちすら、頭を不安定にゆらゆらさせているというありさま。ひょっとして、一応はまともに起きて授業の進行を待っているのは、わたしだけなんじゃないかとすら思う。

それでもお説教の一つも飛んでこないわけは、腕を組んで指導者用の教科書に目を落としながら、ゆっくりとしたリズムで上下する禿げ頭が物語っている。あれはたぶん、頷いているというよりうつらうつらしているのだ。その上の壁掛け時計の動きもにぶいせいで、わたしの脈拍の速さが妙に際立ってしまう。

廊下側の席では、前から二番目の生徒が欠伸まじりの声で『走れメロス』の一節を読み上げていた。ふつうなら良くも悪くももっと賑やかでおかしくない中学校の教室だというのに、ひとの気配がほとんど感じられないのだから、読むほうもやる気がなくて当然だ。ほとんどの子がこんなふうにふにゃふにゃとした情けない声で読んでいるのに、誰も順番を間違えていないのが奇跡だと思う。これでは太宰が可哀想……。と、こんな風にもっともらしい観察でこのかすかな緊張をやり過ごそうとしては失敗して、なおさら妙な熱っぽさにとりこまれそうになるということを、ここ数分、わたしはいたずらに繰り返していた。

すこしたって、その緊張の原因のひとつが訪れるときがきた。

一番前の、右端の席。一つ後ろの生徒の音読を引き継いで、笹井くんがすくりと立ち上がった。座っているときには背の低い彼だけど、ああしてまっすぐに姿勢よくしているときは、すこし背丈が伸びたようにみえる。

わたしは拳を握りしめて目をつむった。

「眼が覚めたのは夜だった」

あの細い身体から響いているとは信じられないほど低く、それでいて甘い声がわたしの耳にこだまする。彼のこの声に、わたしはいつも、吐息で曇らせた雨の日のガ

ラス窓を思いうかべる。
　つまらない授業のなかの、ほんの一瞬のこの時間が、ぞっとするほどどきどきする、わたしだけの秘密のたのしみだった。
「メロスは起きてすぐ、花婿の家を訪れた。そうして、少し事情があるから、結婚式を明日にしてくれ、と頼んだ。婿の牧人は驚き、それはいけない、こちらには未だ何の仕度も出来ていない、葡萄の季節まで待ってくれ、と答えた」
　丁寧な笹井くんの音読は、台詞のところだけいちだんと低くなる。「、と」の直前で彼が息を吸い込むその瞬間までが、わたしの特別のお気に入り。心臓からおなかの下のあたりまでをつらぬく芯から、からだ全体に柔らかい熱が広がる。
　その時だった。
「待つことは出来ぬ、どうか明日にしてくれ給え」
　わたしははっと目を見開いた。
　それまでのどの台詞にもない、たくましく、わたしたちの年齢よりもずっと立派な青年メロスの声。
　それを聴いたときの感覚に、わたしが思い出したのはあの手紙のことだった。
「婿の牧人も頑強であった。なかなか承諾してくれない。夜明けまで議論をつづけて、やっと、どうにか婿をなだめ、すかして、説き伏せた」
　朗々と読み上げる笹井くんの背中をふたたび、今度はまじまじと見つめた。あの立ち姿は。じんわりと瞼が熱くなってゆく。心臓が高く鳴り響く。
　はじめの衝撃は、手足の指先のふるえとなってゆっくりと消えていった。
「結婚式は、真昼に行われた。新郎新婦の、神々への宣誓が済んだころ、黒雲が空を覆い、ぽつりぽつり雨が降り出し、やがて車軸を流すような大雨となった」
　続きを読み上げる笹井くんの声は、わたしにはもうう まく聞き取れていなかった。
　存外に大きな笹井くんのその背中は、昨日の、港にたたずむあのおとうさんの背中によく似ていたのだった。

　授業が終わると、周囲の多くのひとが教科書やノートを鞄にしまって帰り支度をはじめた。多くの生徒たちにとっては、一刻もはやく部活動に行きたい時間なのだ。まだ国語の時間のけだるい雰囲気に取り残されていたのは、わたしを含む帰宅部の数名と、昨日遅くまで彼氏と電話をしていたのだという松野さんだけだった。
　高校生の男の子と付き合っているのだという彼女の語る恋は、他のクラスメイトたちよりも数段大人で、みんなからも人気者だった。わたしはずっと、そんな彼女の話をどこか遠い異国の物語のように感じては、手元の文庫本のほうがはるかにおもしろいことを自分に確かめるばかりだった。
　けれども、今は少しだけ彼女の話していたことがわかるような気がした。
　わたしはそっと机に伏せて耳を塞ぎ、まだ熱く潤んだ瞳を閉じてみる。瞼の裏には、教科書を読み上げる彼の凛々しい後姿がまだ残っていた。わたしが着ると不格好に映る学校指定のYシャツだけれど、笹井くんが着ているそれは、なんだか水兵さんの制服に似ていた。
　わたしが笹井くんのことを思い浮かべるとき、これまでいちばんはじめに浮かんでくるのは彼の声だった。教科書を音読しているときや、日直の挨拶をしているときの。そしてごくたまに、わたしに話しかけてくれるときの声。そしてそれは、わたしのあこがれの相手だった。
　けれどもおとうさんの手紙が、わたしのなかの笹井くんを塗り替えてしまった。いまの彼は、わたしにとってはあの背中。お母さんがかつて港で待ち続けていた人、そしてわたし自身もきっと、気づかないうちに待ちつづけていたものを、わたしは笹井くんのなかに見つけたのだった。
　おとうさんの手紙の、君は相変わらず夜更かしをして、というくだりを思い返してみる。わたしの夜の過ごし方を、誰かになぞられるのはどんな気持ちがするだろう。わたしのからだを気遣われるのはどうだろう。待ち続けているところに、季節のかわり目に手紙がとどくのは。そんなことを考えていると、わたしの前方からいつものあの声がふりかかった。
「梅沢、起きてる？」
　とっさに顔をあげる。笹井くんがそこに立っていた。すらりとした体躯はまるで竹のようで、地面から天井まで一本の糸でしっかりと引っ張られているようだった。笹井くんの姿勢のよさはクラスのみんなにもよく知られていることで、ご両親の教育がきびしいのだともっぱらのうわさだった。これまでのわたしにとっても、それは彼のまとうたくさんの情報のひとつという以上の意味をもっていなかったのだけれど。
「寝てるとこごめん。これ、前回の宿題の返却」
　ありがとう、とお礼を言って、彼が渡してくれた再生紙を受け取る。こちらに差し出された指先は、わたしのものより少し太い。
　じゃあ、と短い挨拶だけを残して遠ざかってゆく、わ

たしのものより少し筋張った彼のうなじのあたりを見据えながら、わたしは恋というおとぎ話の中のことばを、はじめてほんとうに理解させられている気がした。過去のふたりが、わたしにそれを教えてくれたのだ。

スカートのポケットに手を入れて、おとうさんの懐中時計をそっと握りしめる。

金属に覆われたそれは、わたしの体温によってだんだんと熱を帯びていった。

「質問、ですか」

石戸先生の目は微笑みつつも、物珍しそうにこちらを捉えていた。曲がった背骨と、ぷるぷるとおぼつかない手の指先。そのすがたは、実年齢よりずっと年老いてみえる。あれだけ退屈な国語の授業でみんなが騒ぎ出さないのは、そこそこ親切な人柄への愛情もあるのだろうけれど、それ以上にこのおじいさんへの憐れみのほうが大きいのではないかと、わたしは思う。

笹井くんとおとうさんが重なったときの胸の鼓動は、あのあともしばらく鳴りやまなかった。それをなんとか抑え込んで職員室の石戸先生のもとを訪問したのは、昨日手紙で見つけた本の題について尋ねるため。わたしは今朝から、放課後になったらこのことを聞こうと決めていたのだった。

「ほう、ランボオ」

先生は両のつるから紐のぶらさがった眼鏡をくいと持ち上げた。『怒りのアフガン』ですか、との向かいの若い先生の問いかけに石戸先生は直接答えず、かわりに、映画のほうだったらもっと適任の先生に聞いたほうがよいかと、と言った。

本のタイトルです、小説かなにかの。わたしは昨日の手紙を思い出しながら応じる。すると、それならたぶん題名ではないですとの前置きのあとで、

「詩人ですよ、フランスの。アルチュル＝ランボオ」

と告げられた。

それから、ちょっと失敬、とことわりをいれて、先生は机にあるくたびれた分厚い本を、震える指先でゆっくりと手繰り始めた。

職員室の大きな窓のカーテン越しの空は、青から少しずつ紫色にかわるところだった。壁にかかった時計のほうを見ると午後五時前を指していて、少しずつ夏が遠のいてゆくのを実感する。シンガポールの夕焼けはどんなものだったんだろうと、わたしはふと思った。

しばらくして、ありましたよ、と広げられたページには、

『ランボー：らんぼー：Jean-Nicolas Arthur Rimbaud（1854—1891）フランスの詩人。十月二十日、北フランスのアルデンヌ県シャルルビル市に生まれる。陸軍大尉の父と、近郊ロシュ村の小地主の出の母との間の次男であるが、父は任地にいて不在がちのうえ、ランボー六歳のとき以後は戻らず、兄妹とともに母一人の手で育てられた。厳格勤勉で気位が高く、極度の敬神家であり、乾いた性格のこの母親の存在は、詩人の幼時に強い影響を及ぼした……』

とあって、その先に長い説明が続いていた。

最初のほうを一通り読み終えてから、わたしは生没年と「母一人の手で育てられた」というあたりを何度も往復してしまう。時計の入ったポケットが、きゅうに重たくなったような気がした。

薄明かりの部屋のなかでこの人の詩を読みながら、物静かでやさしいあのお母さんは、いったいどんなことを思っていたんだろう。まるで、二人を襲った不幸が約束されていたかのような記述に、わたしの胸がちくりと痛んだ。

「十九世紀の人ですね。わたしも好きなものがいくつかありますよ。早くに亡くなったのが惜しまれますが……」

事典に目を落としたまま先生の説明を聞く。きっとひどく歪んでいる、いまの表情を読み取られるのがしゃくだった。

そのまましばらく黙り込んでいると、大丈夫ですか、と先生に声をかけられた。わたしは慌てて、すみません、と顔をあげる。

さっきと同じような微笑みがそこにあった。

「このページは今度コピーしてお渡ししましょう。……しかし梅沢さん、あなたは本当に読書家だね。はてどこでこの名前を見つけたのか……」

事典をもとに戻しながら何気なくそう言われる。普段からクラスのみんなに変だと言われていたところだから、わたしは不覚にもうれしくなって、お礼を言った声が少しだけうわずる。ことと次第によっては手紙のこともかいつまんで話すつもりだったけれど、やっぱり秘密にしておきたくなった。

けれど、事典を置き終えた先生はこちらを見ていなかった。かわりに、なにかにとりつかれたように遠くに目を向けながら、しかしね、とふと口を開いた。

「Assez connu, Les arrêts de la vie……O rumeurs et Visions」

英語の授業でも聞いたことのない難しい発音に、わたしは首をかしげる。やっぱり変な先生だな、とさっきの

好印象に頭の中でバツをつけているところに、先生は続けた。
『十分わかっている、人生の節目。おお喧騒よ幻影よ』
……ランボオの詩の一節です。大人になるのを急ぐことはない」
頭の中が、今度は混乱でいっぱいになる。
どういうことですか、と聞き返そうとしたが、わたしの唇は、縫い付けられたみたいに動いてくれなかった。この言葉について知りたいわたしと、これ以上聞きたくないわたしが、混乱する本体のわたしをよそに喧嘩をしているように感じた。
わたしがしばらく黙り込んでいると、石戸先生ははっとしてこちらに向き直り、失敬、じゃあまた何かあったらおいで、と言った。それを見とめて、さあ暗くなるから気を付けて帰れよ、とさっきの若い先生も促してくる。そこはかとない不信感を胸のうちに残したまま、わたしは軽く会釈をして、職員室の大人たちに背を向けた。

*

拝啓

早いもので師走も佳境ですが、変わりはないですか。風邪など引いていませんか。とはいえ、君の故郷に比べれば東京の冬はそう厳しくはないのかもしれませんね。

僕はドバイを出てからスエズ運河を通り、先週から欧州へ入りました。今はドイツのハンブルクへ停泊しています。北ドイツの冬は厳しいと聞いていましたが、雪こそ降らないものの寒風が刺すように痛いです。。

しかし、悪いことばかりでもありません。入港の日は十二月二十日、僕は失念していたのですが、ハンブルクの街はすっかりクリスマスの装いに包まれており、ありとあらゆる通りで「クリスマスマーケット」という催しが行われていました。日本でいう縁日のような感じですが、こちらでクリスマスというのは非常に重要な日ですので、その規模は盛大でした。店の軒先は煌びやかな電飾で飾り付けられ、屋台では焼き菓子や飲み物だけでなく雑貨や小物も売られています。グリューワインという、温かいワインに香辛料を加えた飲み物を初めて飲んだのですが、直ぐに体が温まって冷え込む日にはうってつけでした。きっと君も気に入ると思います。ちなみに同封した四枚の栞もそのマーケットで買ったもので、ドイツの有名な民話が描かれているそうです。二十四日も近いのでO・ヘンリーを読み返す時にでも使ってください。

年の瀬も押し迫り、何かと気忙しいころですが、穏やかに年末をお過ごしください。来年も素晴らしい年になるよう願っています。

敬具

＊＊

「ずいぶん楽しそうに読んでいるのね」

晩御飯の支度を待つ時間を食卓で過ごしているわたしに、か細い声がそう尋ねる。具材の下ごしらえを終えて、手の空いたらしいお母さんが話しかけてきたのだった。

ちょうど「伯爵と婚礼の客」の短編を読み終えたわたしは、小さな人形のストラップがついたお気に入りの栞を、次の作品のとびらのところにはさんで『O・ヘンリー短編集』を閉じる。おとうさんの手紙に出てくる作家は読んでおこうと思って、図書室で借りてきたものだった。

はじめはランボオを読んでみようと思ったのに、残念ながら学校には置かれていなかった。石戸先生に持っていないか訊いてみることもできたけれど、このあいだのこともあって、わたしはちょっと先生を避けていた。それで代わりに、この前見かけたばかりのO・ヘンリーにしたのだった。ひとつずつの話は短くて、ちょっとした時間に読めるのが楽しい。こわい作品もいくつかあるけれど、この「伯爵と婚礼の客」みたいな、胸のあったかくなる話もたくさんはいっている。

「あら、オー・ヘンリー？　懐かしい」

陶器のような白い首ですこしだけこちらを覗き込んで、お母さんがつぶやくように言った。

お母さんも読んだことがあるの、とたずねてみる。答えはおとうさんが教えてくれたからわかっているのだけれど、それはわたしだけの秘密。それに、あらためてお母さんの口から聞いたほうが、わたしの知らない二人の話を教えてもらえるかもしれない。

「あるわよ、私も若い頃はあなたぐらい本を読んだもの」

それはそうだろうと思った。おとうさんの手紙を読んで知ったのもあるが、これはどちらかというと日頃からわたしが実感していたことだ。ふだんは自分からあまり話しかけてこないお母さんも、本のこととなるといつも少しだけ口数が多くなる。そんなお母さんの読書する姿をわたしがあまり見かけないのは、パートの仕事の忙しさに加えて、家にいるときも働いているか、疲れて寝てしまっているからだろう。ご飯の支度ぐらいはせめてわたしが、と思うのだけれど、この前おいもを煮ていた鍋を放置して焦げつかせてしまってから、手伝いの申し出はそれとなく断られつづけている。

「最後まで読み終えて、こわくなる話も多い。そういうのは、わたしはあんまり好きじゃないかも」

「誰に似たのかしら。そういう心臓に悪いショート・ショートも、私は昔から好きだけれど」

こちらは、いつもどこか儚い雰囲気をまとっているお母さんからはあまり想像のつかない話だった。楽しみに待っていたものがふいに出てきて、驚きながらもうれしくなる。

つづきを聞きたくて身を乗り出すけれど、ちょうど沸騰したらしい鍋に、お母さんをしばらく奪われてしまった。その小さな後姿を見つめながら、わたしは内心ちょっとふてくされている。

「そういえば「最後の一葉」はもう読んだ？」

鍋の火加減を調節しながら、お母さんがふたたび口を開いた。その奥のカセットコンロでは、なべぶたの穴のところからもうもうと湯気がたっていて、部屋には煮えた野菜の匂いがただよいはじめていた。

「最後の一葉」はこの短編集のいちばんはじめに載っ

ていた。身寄りのないおじいさんが、はやり病にかかって希望を失った女の子を勇気づけようと、激しい雨の降る屋外で絵を描いて、自分が病気になって死んでしまう。女の子のほうは結局回復するのだけれど、わたしはおじいさんのことが引っかかって、どこかかなしい話だと思った。

「そうね、悲しい。でもオー・ヘンリーの中では、私はこれが一番素敵なお話だと思うわ」

わたしはお母さんにそのわけをたずねる。いつもはほとんどわたしの話を聞くばかりのお母さんが、今日は自分の読んだものについて話してくれようとしている。わたしはおとうさんの手紙にこっそり感謝した。

お母さんは柳の枝のような腕で慎重に鍋をかき混ぜながら、病気が流行る中では、そのままでもおじいさんは感染して死んでいただろう、だからおじいさんは、絵を描いたせいで死んでしまったのではなくて、死ぬ前に最高の作品をかき上げることができたのではないかということを、丁寧に説明してくれた。聞きながら、わたしはおとうさんの手紙のことを思い起す。

おとうさんもそうだよね。わたしは心のなかで両親ふたりに言った。海に出たせいで死んでしまったのではなく、死ぬまで海にいたい、勇敢な人だったんだ。

「私はね、昔は雨が嫌いだったの。でもあれを読んでから、少しずつ好きになったわ。今では晴れの日なんかよりよほど出かけたくなるぐらいだけど」

そのちょっとした冒険心はおとうさんの影響？　それにしても「最後の一葉」の話題のあとで雨の日に出かける話をするなんて、ちょっと縁起でもない。そんなことを思っていると、さあご飯が出来たわよ、とお母さんがこちらを振り返って言った。

はい、と返事をする自分の声はいつもより少し明るかった。

照明がわりの夕日がほのかに照らす、放課後の教室。笹井くんとわたしは、それぞれの席にはなればなれで座っていた。

クラスメイトたちは出払ってしまい、わたしたちのほかには誰もいない。九月は第四週も終わりに差しかかっていて、来週にはテスト期間に入るものだから、みんな残り少ない時間を惜しむように、部活に精を出しはじめるのだ。だからこんな時間まで教室にたむろしているのは、本ばかり読んでいるわたしと、両親に部活動を禁止されているという笹井くんぐらいのものだった。

先週まで、わたしのお決まりの居場所はここではなくて図書室だった。まだ人もちらほらいてうるさかった教室は落ち着かなくて、読書には向かないと感じていたからだ。

けれども、今は。

O・ヘンリーの短編集からときおり顔をあげて、一番前の席で勉強に集中している笹井くんの後ろ姿を盗み見る。清潔な白いシャツが、窓から差し込む陽の光でほのかなオレンジ色に染まっていた。まだブレザーの着用が始まっていない時期だから、Yシャツ一枚でいる笹井くんの背中には、ごつごつした肩甲骨が浮き出ている。クリスマスの冷え込む日からはまだまだほど遠い夕方だというのに、わたしのからだはグリューワインを飲んだみたいに、すぐにあたたかくなる。わたしはそんなふうにして、笹井くんのほうを見つめては、身体の芯から燃えあがってくるような高熱に慌てて首を横に振り、本のほうに向きなおるのだった。

短編集は、ちょうど「賢者の贈り物」のラストのところだった。夫婦がおたがいのためのクリスマスプレゼントを買おうと、それぞれ自分の宝物を売ってしまうという話だ。おとうさんが二十四日にかんしてO・ヘンリーの名前を持ちだしたのは、この短編からの連想だったようだ。

わたしはスカートのポケットに手をいれて、おとうさんの懐中時計を取り出してみた。左右に傾けると、陽のあたる角度が変わって、蓋の表面のこまかい細工がきらきらと反射する。「賢者の贈り物」に出てくる、旦那さんのほうの宝物は時計だった。ひょっとすると、これはお母さんからのクリスマスプレゼントだったのかもしれない。そんなふうに考えると、この時計がおとうさんの書斎から持ち出したときよりも、ずっと大切なものに感じられた。

「賢者の贈り物」を読み終えたちょうどそのとき、下校時刻を告げるチャイムが鳴りわたった。本から顔をあげると、笹井くんが帰り支度を始めるところだった。わたしも机の上の懐中時計をスカートのポケットにしまうと、いま読み終えたページのところに人差し指を挟んで本を閉じる。

ところが、机のうえに置いてあったはずの栞が見当たらなかった。

慌てて鞄のなかを探ってみるけれど、どのポケットにも入っていなかった。おかしい、今日読み始めたときには、ちゃんと挟んであったはずなのに。机の中や後方のロッカーまでも確認してみるけれど、そこにはいつも入れっぱなしの荷物があるばかりだった。

「どうしよう……」
わたしにとってあの栞は、ただのお気に入りというだけではない。てっぺんの穴のところにぶら下がっている人形のかざりは、むかしお母さんと二人で出かけたときに買ってもらい、以来何年もつけているものだった。
泣きそうになりながらはいつくばって床を探していると、
「なにか失くしたの」
鞄を背負った笹井くんが近づいてきた。
ふだんめったに会話をしない彼が自分から声をかけてくれたことに少しどきどきするけれど、すぐに栞をなくした辛さのほうがまさって、何も取りつくろう余裕などなかった。
「いつも使っている栞が見当たらなくて……」
「机の中とか、ポケットの中は見た？」
机は見た。ポケットはいつも時計を入れているから、ないと思う。そんなことを言いながらスカートのポケットに手を入れてみる。
すると探していた栞は、懐中時計を入れているのとは反対側から、あっけなく出てきた。
しばらく気まずい沈黙が流れる。
「……ごめん、ポケットだった」
小言の一つも言われるかと、おそるおそる笹井くんの顔を見上げる。
しかし、彼は顔色一つ変えず、俺もよく家の鍵で似たようなことやるから、とだけ言った。そのそっけないけれどやさしい態度に、探し物が見つかった安心感が重なり、火がついたように顔が熱くなる。
じゃあ、俺これから塾だから、と笹井くんは出入り口のほうに向かっていった。忙しいのにごめん、ありがとう。なんとかそう絞り出すと、笹井くんは顔だけをこちらに向けなおして、少しだけ微笑んだ。
「どういたしまして」
去っていく笹井くんの背中が壁の影に消えてゆくまで、わたしは彼の後ろ姿を見送りつづけた。
それから、手の中に残った、さっきまで必死に探していた栞の、小さな人形を見つめる。これがわたしの宝物である理由が、今日ひとつ増えてしまった。
これはもしかしたら、おとうさんからわたしへの贈り物なのかもしれない。そんなふうにさえ思うのだった。

「そんなことがあったのね」
お茶を淹れながら、お母さんがそうつぶやく。
シンクで夕飯の食器を洗いながら、わたしは今日の放課後の事件をお母さんに語った。なくしものの話題を、プレゼントしてくれた本人に聞かせるのは少しだけばつが悪かったけれど、おかあさんはそれについては何も言わずに、あら、そうなのと節目節目で相槌をうつばかりだった。
「ねえ、お母さんはどこでおとうさんと出会ったの？」
話し終えたあと、ふと思いついて、なんでもないことのように訊ねてみる。おとうさんの手紙にはわたしの知らない二人のことがたくさん書いてあったけれど、いまだに読んだことのない話のひとつは、お母さんと付き合いはじめるまでの経緯のことだった。
お母さんはそれには直接答えず、そんなことを聞いてくるなんて、笹井くんという子はとても恰好いいのね、と、戸棚から湯呑みを取り出しながら冗談まじりに言った。
もう、そんなんじゃないって、と慌てて否定してみるも、ちょうどいま洗っているところの、洗剤でぬめった茶碗を取り落としそうになる。ふだんわたしの学校生活について深く追求してくることのないお母さんだから、こうしてたまにからかわれると気恥ずかしい。まして今回は笹井くんのことだからなおさらだった。おとうさんはどんな男の人だったのかなって思っただけ。思い出したように付け足す声が大きくなって、自分でもわざとらしいとさえ感じる。
「わたしが働いてた港近くの喫茶店に、停泊中のおとうさんが立ち寄っただけよ」
「それで？　話しかけたのはどっちからなの？」
「どっちからだったかしら」
昔のことだから忘れてしまったわ。はぐらかすように言われて、わたしはちょっとだけくちびるを噛んだ。
「もう、教えてくれたっていいじゃん」
二人ですごしたクリスマスのこととかさ、とこれは心のなかで付け加える。
しかしお母さんは、忘れちゃった、思い出したら話してあげるの一点張りで、それ以上なにも教えてくれようとはしない。
わたしは洗い終えた皿を雑巾で拭きながら、しかたなく溜息をついた。お母さんはわたしの皿洗いが終わったのを見とめて、ちょうどお茶があがったわよ、と急須の中身を二つの湯呑みに移しながら言った。
わたしはタオルで手を拭くと、ありがとう、と食卓の椅子についた。
「今でも覚えているのはね、」
片方の湯呑みに手を伸ばそうとしたとき、お母さんが

唐突に口を開いた。
不意をつかれて、わたしははじかれたようにお母さんの顔を見る。
そこにはいつもの微笑みと、少しだけ遠くを見るようなまなざしがあった。
「出会ったのは夏。よく晴れた青空でね」
雪国の出だから、自分は夏の海に憧れるんだって、あの人はそう言ったの。
お母さんはぼそりとそうつぶやいた。

＊＊

拝啓

春寒も少しずつ和らぎ、日本では桜の蕾が少しずつ膨らむ頃ですね。お元気でお過ごしですか。桜といえば、今年は花見に行けそうもないのが残念です。

数日前から滞在している米国ロサンゼルスは快晴が多く、とても過ごしやすい所です。ロングビーチでは彼の有名なクイーン・メリー号を一目見ることもできました。職業柄、船を見るのには慣れていますが、近代的な船舶とはまた違う優雅な美を湛えた客船にはロマンを感じざるを得ません。この豪華客船には「エンジンルームの霊」という噂があるのですが、港湾で知り合った別船の船員がそれを見たというのです。なかなかに興味深い体験談だったのですが、この手の話をすると怒られそうなのでここらで止しておきます。

さて、本題に戻りますが、ロサンゼルスといえば映画と音楽の街でもあります。同僚に映画好きの奴がいて、色々と話を聞いていたのですが、あの『雨に唄えば』もロサンゼルスが舞台だそうです。高田馬場の映画館で一緒に見たのが懐かしいですね。その帰り道のこともよく覚えています。映画館を出ると雨が降っていて、僕が映画の真似をして傘を差さずに踊ってみてやろうとすると、風邪を引くと君に窘められてしまいました。君の方がいつもしっかりしているから、どちらが年上か分からないと呆れられることもしばしばでしたね。僕が年長者然と振舞えるのはホラー映画を見る時くらいでしょうか。君は凛々しいという言葉がぴたりと当てはまる顔立ちをしているので、怪談の類や猟奇的な物語が大の苦手と知った時はとても意外でした。そうとは知らずヒッチコックの『サイコ』を見に行こうと誘ったり、乱歩の『孤島の鬼』を貸したりなんかしていたので、君に叱られたときには何だか申し訳なかった。こうして学生時代の思い出を綴っていると、とても懐かしい気持ちです。近況報告のつもりで手紙を書いているのに、近頃どうも思い出話が多くなってしまうのは俗にいうホーム・シックというやつでしょうか。

今回は航海の日程が押しており、なかなか街を見て回る時間が取れそうにないのが残念です。大した物じゃありませんが、絵葉書を幾枚か入れておきます。船内も慌ただしく心休まらぬ日々が続きますが、嬉しい知らせも一つあります。このまま予定通り行けば、夏前には帰国できそうです。詳細な日程の目途が立ち次第、また連絡します。思わぬ花冷えに風邪など引きませんよう。

敬具

＊＊＊

花冷えなんて季節ではないのに、午後になって寒々しい雨がぽつぽつ降りだしたときは、いよいよおとうさんと共鳴しているような気がした。ロサンゼルスも高田馬場も行ったことのないわたしでも、ちゃんとおとうさんの娘なんだ。定期テスト前の憂鬱な授業のなか、薄暗い窓の外を眺めながら、そんなことを思っていた。

放課後の帰り道、ひっそりとした路地に差し掛かったとき、わたしはまわりに人がいないのを確認してから、そっと傘を閉じてみた。

屋根を失った頭のてっぺんに、冷たい雨粒のふりそそぐ感覚がふしぎと心地いい。映画の俳優さんは、どんなふうに踊ったのだろうか。まったく知らない映画のことだから、主役が男の人なのか、女の人なのかもわからない。けれどもきっとおとうさんによく似た、たくましくて、ちょっと冒険心がすぎるぐらいの男のひとだ。

歩くペースをスキップに。それから立ち止まって、ちょっとターンを挟んで。写真やテレビでしか知らないバレリーナの動きをなぞって、飛んでみたり、くるくる回ってみたり。スカートのなかの、おとうさんの懐中時計もぴょんぴょん跳ねる。音楽にかわっていく雨音。冷たい水が制服ごしに身体全体を濡らして、わたしはそのリズムと一体になる。口笛を吹きたくなるという、本でしか知らなかった感情が、いまわたしのなかではっきりと形をとっているような気がした。

もっと想像をはたらかせようと、瞼を閉じてみた。

瞬間、あちらこちらに叩きつける水の音がふいに激しく泡立って聴こえ、思わずステップを止めた。その拍子に、足を滑らせて前のめりに倒れる身体。慌てて地面に手を伸ばす。

手のひらがコンクリートに衝突して、痛みが走った。

激しくはないが、ひりひりと灼けつくような感覚。慎重に観察しても出血はなさそうだったけれど、水びたしの地面に触れたせいで、指のつけ根のあたりがうす汚れていた。

とりあえず上体だけを起こしてしゃがみ込むような姿勢をとると、わたしは鞄からハンドタオルを取り出して、手の水分をそっと拭き取る。さっきまで魔法のようなきらめきが嘘のように、自分の身体から力が失われてしおれてゆくのを感じた。たぶん、これは寒さのせいではない。

立ち上がる気になれなくてしばらくそのまま俯いていたら、頭上から聞き覚えのある低い声が降り注いだ。

「あの、大丈夫ですか……？」

雨音の中でもはっきり届くその声に、わたしはふっと

顔をあげる。
大きな黒い傘をさす笹井くんがそこに立っていた。
十月に入って上着をまとうようになった彼の肩は、こうして見上げているとなおさら大きく感じる。
「あ、梅沢だったのか。立てる？　どっか調子悪い？」
呆然としているところになされた無邪気な配慮に、ばつが悪くなって少し目を逸らす。けれども、彼は気にしたようすもなく、ちょっとかがみ込むと、わたしのほうに手を差し出してくれる。
黒い袖からすっと伸びた陶器のような指先に、思わず頬が熱くなる。気づかれたくなくてぎゅっと顎をひきつつ、おそるおそるその手をとった。
秋雨に冷え切った彼の体温を感じとるまもなく、わたしの腕は体ごと持ち上げられて、笹井くんに引き寄せられる。
どくどくと鳴り響く、この心臓の音が彼にまで聴こえるかもしれない。
そう恐れた時には、笹井くんはすでにわたしの手を放していた。
「どっか痛いとか？　それとも怪我？」
笹井くんがわたしに尋ねる。さっきまでの余韻にほだされながら、目線を落としたまま、ふるふると首を横に振った。何か嘘をついてもよかったとあくどい考えが浮かんだときには、彼はもう、自分の鞄を背負いなおして立ち去ろうとするところだった。
「あ、あのさ」
わたしの声に、笹井くんは立ち止まった。背骨と肩甲骨のぴんと伸びたその背中は、振り返るときも微動だにしない。
「何？」
彼の細い切れ長の瞳に捉えられて、つづきの言葉が見つからない。思えばもう少し一緒にいたいと、それだけの動機で声をかけたのだった。
「ううん、なんでもない。来週のテスト、大変だけど頑張ろうね」
ぺらぺらと口を動かしながら手を振る。テレビの人形劇みたいに、身体が見えない糸でだれかに操られているみたいだった。
「……はやく終わってほしいな」
うつむいて、すこしだけ微笑んだ笹井くんがこぼした、低い、ぽそっとした呟きに思わずドキリとする。
慌てて、そうだね、と頷いてから、わたしは踵を返して、逃げるように反対方向へと駆け出した。
足を動かすたびに小さなしぶきが跳ねるけれど、それすらちょっと心地よい。無心になろうとしても、気づけば口角があがってしまう。いつのまにか、足取りはふたたびスキップビートを刻んでいた。

デスクライトの弱々しい照明のせいで、網膜が完全に疲れきっていた。
机のうえのプリントをひっかきまわしながら、ノートに自分でも意味の分からない数式を書き連ねたり、ときおり頭をがりがりと掻きむしったりして、もう数時間ほど、目の前の問題集と悪戦苦闘している。机の上では、おとうさんの懐中時計が午前一時を指していた。おとうさんは文系と理系、どっちだったんだろうか。でもきっとわたしよりは勉強ができたにちがいない。
中学生にとっての、慌ただしく心休まらぬ日々はこれが最終日だった。けれど、苦手な数学の待つ明日は、わたしにとってこのテスト期間でいちばんの鬼門でもある。これで全部終わるんだという期待と、それだけにいらいらするほど長ったらしい時間の感覚がぶつかりあって、焦りだけが募っていく。
だいたい、先生が初めから答えを知っている方程式を解くことにいったい何の意味があるというんだろう。そんなのはどの教科も一緒のはずなのだけれど、目の前の機械的な記号の羅列を見るたびに、自分がしていることがむなしく感じられて、それがいっそう、わたしのいらだちに拍車をかけていた。
背後で三度ノックの音がした。入るわよ、とひとことあったあと、扉を開けてお母さんがこちらに向かってきた。
わたしは懐中時計をプリントの下に隠すと、そちらを振り返った。
「なに？　まだ起きてたんだ」
自分の口から出たとは思えないほど、つめたい声だった。
「私もあまり眠れなくて。ねえ、ココアを淹れたのだけれど……」
見ると、お母さんの持つお盆のうえのマグカップからはもうもうと湯気があがっている。
「いい、いらない」
ほんの少し気分が悪いだけで、どうしようもない意地悪を口にしてしまうのが自分でも嫌なはずなのに、口をついて出てしまうのがなさけない。
「そう」
それでもお母さんは微笑んだままだった。いつも甘えているその余裕が、今日は少しだけ腹立たしい。

「あまり無理はしないのよ」
やさしくそう言われただけなのに、最初のやりとりが気にさわったばかりに、わたしの頭にはどんどん血がのぼっていった。
「おとうさんにも、そういうお節介を焼いてたの？」
わけのわからない言いがかりが、わたしの身体から勝手に飛び出した。けれども一度口火を切ってしまったものは、自分でもとどめようがなかった。
「……どうして、そんなことを言うの？」
お母さんの顔から笑みが消えていく。傷ついたようなその瞳は、それでもわたしを捉えて離さなかった。
わたしははっとして、
「ごめん」
とだけ、呟くように言った。
お母さんはひとつ溜息をつくと、悲しそうな顔をしたまま、部屋を出ていった。

翌朝目を覚ますと、お母さんはもうパートに出かけていて、食卓にはラップのかかった朝食のプレートと、「テスト頑張ってね」というメモだけが残されていた。
スクランブルエッグは、口に入れるとちょっとしょっぱかった。
今日お母さんが帰ってきたら、昨日の喧嘩のことはあらためてちゃんと謝ろう。歯を磨きながらそう思った。
決意をすると、少しだけ心が軽くなる。制服を着替える頃には歌まで口ずさんでいる自分がいて、悪びれなさにちょっとだけ恥ずかしくなった。
玄関の戸を開けると、空は青々と晴れ渡っていて、暖かくさっぱりとした風に身を包まれる。
教科書の入っていない、いつもより軽い鞄を肩にかけて、わたしは家を出た。

数学のテストは散々だったけれど、何よりも終わったことにほっとした。これでしばらく苦手な数式とにらめっこせずにすむ。
長かった定期テストの最後を飾るのは国語だった。
石戸先生の授業に対する生徒たちの評価は、テストの時期になると、がぜん低くなる。問題用紙が手書きだからだ。字がきれいなのがせめてもの救いだけれど、それでも誤字があったり滲んでいたりすると、問題を解く手が止まる。開き直ってこういう形式にしているならまだわかるが、当の先生自身はワープロを使いたいと思っているらしいから始末に負えない。
ただ、わたし自身についていえば、国語のテストはさほど苦ではなかった。授業のときにノートに書き留めたことを覚えておけば、とりあえずの点数はとれるからだ。今回も、笹井くんとちがって高得点を目指しているのでもなく、だけど松野さんとちがって一応は先生の話を聞いていたわたしは、手のつけられる問題を一通り解き終えたあとで、机に突っ伏して昨晩の睡眠不足を取り返すことにした。
夢のなかで、わたしは港にいた。
あたりには小さなボートが浮かぶだけで、人も店もまばらな、コンクリートの波止場。視界の端に見える丘の木々はやさしい黄緑色に染まっていて、正面の深いブルーをふちどって、あざやかな彩りを添えている。向かってくる風はまだ寒いけれど、空気は少しずつ温かくなっていて、すぐそこに来ている夏の気配を感じる。海辺の強い日光を、わたしは傘で遮りながら、手元の懐中時計に目をやる。やがて約束の時刻がきて、汽笛の音と共に、貨物を満載した、大きな船がやってきた。甲板からタラップが下りて、白い制服に身をつつんだ、すらりとした立派な身体つきの男の人が降りてくる。ポケットからわたしとお揃いの懐中時計を取り出して、ちらと見た後、こちらに気づいて手を振る彼。船出の間にまた痩せたかしらと心配して、彼の頬に両の手を差し伸べるわたし……。
ふわふわとした感覚のなかに、突然ガシャンと大きな音が割り込んできて、はっと顔をあげた。
しだいに意識がはっきりしてきて、ここが港ではなくテスト中の教室であることを思い出す。どうやら持ち回りで来ている試験監督の先生が、教卓周りにあった何かをいじって壊してしまったらしい。まるで母親に叱られることを恐れる子どもみたいに、頭を抱えながらおろおろしている。
トラブルを引き起こしたのが普段偉そうな先生だったからだろう、周りでは、どの子もみんな笑いをこらえてぷるぷるしていた。先生も先生で、風紀指導のときの厳格さが嘘のように、苦笑いを浮かべつつ、救いを求めるように生徒たちへと視線をむけている。誰一人言葉を発しないまま、妙な時間が流れる。わたしもおかしくなって、くるりと教室を見渡した。
けれども、廊下側までたどりついたところで、わたしの目はぴたりと勝手に停止した。
みな教卓のほうを見上げているこのときに、問題用紙に覆いかぶさったまま、尋常ではない震えと格闘してい

る身体がひとつあった。その男の子は、ときおり宙を眺めては、なにかを否定するようにぶんぶんと首を横に振り、それからまた突っ伏す。そんなことを繰り返している。

わたしはほんの一瞬、それが誰なのかまったくわからなかった。

が、一番前の座席で弱々しく丸まっている背中は、さっきまで堂々とした竹のような身体がそこにあっただけに、なおさら際立ってわたしの視界に飛び込んできたのだった。

それは紛れもなく笹井くんだった。

体調不良かな。それともみんなと同じように笑っているだけかな。頭の中の論理的な部分はそんな仮説を立てて満足しているけれど、それを無視して、わたしの脈拍はどんどん速くなってゆく。

いまだに楽し気な雰囲気に包まれたままの教室。

相変わらず苦しそうに頭を抱える笹井くん。

注意がそれたままの試験監督の先生。

ゆっくりと頭を上げる笹井くん。

それはほんの一瞬のことだった。

笹井くんの青くなった横顔が、ちらと、しかしはっきりとこちらから見えた、そのことの意味に気づいたときには、すでにすべては完了していた。笹井くんは一瞬だけ真横に向けた視線をもとに戻して、さも真剣にテスト用紙に向かっていたかのように姿勢を正した。

震えだけが、さっきと同じように続いていた。

時計は試験終了まで残り一五分を告げていた。わたしは、笹井くんを見るわたしにこれまでまとわりついていた、あのほんのりとした温度が身体の芯から徐々に失われていって、かわりに、脳の後ろのあたりがずきずきと痛んでゆくのを感じていた。

違う、わたしの彼は、わたしの慕う笹井くんはそんなんじゃない。

必死になって否定している相手が、自分自身なのか、それとも教室の前方の席で相変わらず震えているあの男の子なのか、次第にわからなくなっていく。後頭部がひび割れるように痛んでいて、いま壊れつつあるのはいったい何なのだろう。

読め。

うなりをあげて変質してゆくわたしの身体のなかで、まだはっきりと意識を保っている部分が、わたしにそう命じる。

読め。あの手紙だ。

お前の現実を守るために。

＊＊＊

＊＊＊＊

帰りのホームルームが終わるやいなや、わたしは一目散に学校を飛び出した。全力で駆動する両足の速度に追いつこうと、全身の呼吸器官に緊張が走る。日頃から運動不足でいると、いざというときにツケが回ってくるものだ。息を切らして何度も立ち止まりながら、それでもわたしは走り続けた。高速で通りすぎてゆく、いつもの帰路の風景。照り付ける太陽に汗ばんで湿ったわたしを、冷たい空気が切り付ける。

家には数分のうちにたどり着いた。

取っ手に掴みかかって、玄関の扉を乱暴に引く。が、ガタンと留め具が衝突する音がするだけで、戸はそれ以上動こうとしない。お母さんはまだ帰ってきていないようだ。わたしは鞄のポケットから鍵をひきずり出して、乱暴に鍵穴にねじこんで回した。

玄関のたたきに荷物を全部放り出して、わたしはおとうさんの書斎に急いだ。

早く。なにかが狂ってしまう前に。

部屋のなかはまだ十月だというのにひんやりとしていて、汗に濡れたわたしの身体には少し寒いほどだった。手紙の入った、部屋の奥の箪笥に駆け寄る。ブレザーの中に手を突っ込んで、おとうさんの懐中時計を取りだすと、蓋を開けてからそっと両手で包み込んで額のところに寄せた。

おとうさんお願い、わたしを助けて。

机の端に手を伸ばして時計を置くと、右上のつまみに手をかけて引き出しを奥まで開ける。この前読んだ続きあたりの紙を、一つ選んでつまみ取る。

しかし、冒頭の時候の挨拶は秋のもので、しかももっと昔のもののようだった。「また連絡する」とおとうさんが書いていた、すぐ次の手紙は簡単に見つかるだろうというわたしの期待はあっさり裏切られた。

仕方なくそれを床に放り投げて、別の手紙を探す。これは冬。こっちも秋。これは年賀。違う、違う。

引き出しの手紙はどんどん減ってゆく。それなのに、おとうさんが到着する日時を書いたはずの晩春の手紙は、いつまで経っても見当たらない。

かれこれ十数通に目を通しただろうか。

いまちょうど開いたのは、初春のあいさつで始まる手紙だった。これも違う。すぐに閉じようとしたが、嵐のあとの平穏を象徴するような書き出しに惹かれて、少しだけ先まで読むことにした。

手紙の文字は、心なしかいつもより震えているようにみえた。

拝啓

暦の上ではもう春ですが、いかがお過ごしですか。日本では梅の蕾がほころびだす頃でしょうか。便りが来るまで少し空いたので、体調でも崩したのかと心配しましたが、何事も無かったようで幸いです。

此方ウラジオストクは想像を絶する寒さで、夏が苦手な僕でも今回ばかりは南国へでも逃げたい気分です。一日中零度を下回る気温の日が続き、分厚い雲が空を覆う様は見ていて気が滅入りそうです。新人の中には塞ぎ込んでしまった奴もいる程です。良い船乗りになるためには座学も実習も疎かにしてはいけませんが、長期に渡る任務をやり遂げるための胆力も必要不可欠であることを改めて実感しております。けれど君は軟弱な僕なんぞよりずっと克己心のある人なので心配はしていません。

吹雪を見ていて思い出したのですが、三年前東京に雪が積もった日に君が聴かせてくれたのはチャイコフスキーの「冬の日の幻想」だったでしょうか。君は情緒的で素晴らしいと言ったけれど、僕は何かに追われているような感じもして少し恐ろしく感じました。船内から雪の吹き荒ぶ黒い海を見ていると、彼の曲は正にロシアの冬であることがよく分かります。

ウラジオストクといえばシベリア鉄道の東の起点となったウラジオストク駅もあるのですが、生憎の悪天候が続くため数日は船内での業務が立て込みそうです。すっきりとした快晴を冬のロシアに期待するのは難しそうですが、仕事が落ち着いたら観光地になっている灯台へ足を運んでみようかと思っています。

手紙に書くか迷ったのですが、船内でちょっとした揉め事が起きまして、少し憂鬱になっています。こんな時君だったら躊躇わずに仲裁に入るのでしょうが、普段から厄介事はへらっとしてやり過ごしてしまう性質の僕には荷が重いのです。愚痴を聞かせてしまって申し訳ない。けれど、弱音を吐いてばかりではいけないので、ウラジオストクから出るまでには解決するよう、双方の話を聞くところから始めたいと思います。

こんなことを書いておいて何ですが、僕のことは心配なさらず。春の便りを心待ちにしつつ、お互い体には気を付けて過ごしましょう。それではまた。

敬具

両手が、手の甲あたりから無性に力んでいった。震え

と汗を必死にごまかそうと、手紙を支える指先を親指の付け根に擦りつける動作を繰り返した。たちまち手紙には折り目に沿ってしわが寄り、端のところがくたびれる。この手紙がずいぶん昔に書かれたものであることが、急にわたしの目前に突きつけられた思いがした。

最後の行を読んだか読まないかのうちに、「拝啓」のところに戻って初めから読みなおす。

何かの間違いであってほしい。そうでなければ、わたしはいったい何に縋ってきたというのか。

しかし、必死に字句を追っている身体のほうをよそに、わたしの頭は往復のたびに冴えわたっていった。これまで読んできた手紙のなかの、奥底に追いやっていた箇所が、意識の水面から次々と顔を出す。

最後に浮かんできたのは、お母さんに宛てられたと思ってきたこの手紙たちが、当のおとうさん自身の書斎から出てきたのはどうしてか、という、最初から気づけたはずのとても単純な問いだった。

わたしは今読んでいたロシアからの手紙を、そっと箪笥のうえに置いた。

そうして一度だけ深呼吸をすると、ふたたび手紙の引き出しに手を伸ばし、残された数通から、一番奥のものを開いた。

その手紙は、いままでで一番短いものだった。

拝啓

見上げるような入道雲が夏の訪れを告げるこの頃、お変わりなくお暮しですか。僕は先日帰国し、今日まで神戸港に停泊中です。船上から見る八月の真っ赤な夕日は、海へと溶けるように沈んでいきます。確かに君と同じ季節を感じています。

きっと君は多忙な時期だろうから簡潔にと思ったのですが、手紙でも冗長に語ってしまうのは僕の欠点ですね。最後までこの悪癖に付き合ってくれてありがとう。

末筆ながら、御結婚おめでとうございます。君が選ぶのだからお相手はきっと素敵な女性に違いありませんね。お二人の船出に幸多からんことを。

敬具

その手紙は、はっきりとわたしに告げていた。

これまでの手紙に求めてきた恋人ふたりは、初めからわたしの頭の中にしかいなかったのだということを。わたしは、たくましい青年としとやかな娘というどこからか持ってきた物語を、現実に当てはめて、勝手に楽しんでいただけなのだということを。

あの後頭部の痛みが、再びわたしに襲いかかってくる。わたしのなかの何かが狂ってゆく痛み、いや、狂ったわたしが、世界によって矯正されてゆくときの痛みだ。ズキズキと、首から背中のあたりにまで差しこんでくる。

そのとき、背後でガラスの砕ける、悲鳴のような音がした。

振り返った視界に飛び込んできたのは、床に転がった開きっぱなしの懐中時計と、入り口のところに立つ、細い二本の脚だった。

恐る恐る視線を上げて、その表情をうかがう。

なにかを諦めたような悲しげな微笑みは、ちょうど昨晩目にしたものと同じ、お母さんのものだった。

ほんのしばらくの沈黙。

それからはっとして、机の足元に駆け寄る。取り上げた懐中時計の天板には、大きなひび割れが入っていた。

＊＊＊＊

それから次第に気温が下がってゆき、冬が来て、そして梅の蕾のほころぶ季節になった。
年が明けた教室は、来年の高校受験に向けて僅かずつ緊張感が漂うようになってきた。これまで本ばかり読んでいた昼休みの私も、徐々に参考書を広げる頻度が高まっていた。
ある昼休み。いつものように勉強していた私の近くで、男子たちが噂話をしていた。
「笹井、松野さんに告白したらしいよ」
「マジ？　松野さんに彼氏がいるのなんて、みんな知ってるのに」
「相手は高校生だろ？　笹井じゃかないっこないや」
たぶん笹井くんは知らなかったのだろう。私は彼らに聴こえないようにクスリと笑った。笑いながら、どこからも体温の上がる感覚がしないことに気づいた。

桜の季節も過ぎ、にわかに葉の色が深まっていった。
三年生になっても石戸先生の授業を聞いている人は少ないままだった。眠る人こそ減ったものの、代わりに多くの生徒が密かに自習するようになった。先生はそのことを知ってか知らずか、相変わらず生徒たちに音読をさせては微睡んでいる。私自身も、国語の時間には苦手な数学の問題集を進めることにしていた。
しかし七月のある午後の授業、私はいつもの形ばかりの音読の中に、微かに懐かしい響きを聴きとめて顔をあげた。隣の席の笹井くんが起立して読み上げていたのは、魯迅の『故郷』の一節だった。
「わたしも横になって、船の底に水のぶつかる音を聞きながら、今、自分は、自分の道を歩いているとわかった」

年が明けた頃から、男子たちの声色はどんどん低くなっており、笹井くんの音読からもあの頃の抑揚はとうに失われていた。
「まどろみかけたわたしの目に、海辺の広い緑の砂地が浮かんでくる。その上の紺碧の空には、金色の丸い月がかかっている。思うに希望とは、もともとあるものとも言えぬし、ないものとも言えない。それは地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ」
けれど私は、この声だけは忘れずにいようと思った。

父の書斎での四度目の秋が訪れることはなかった。

（終）